



往來單諸大咸卷第十八目錄

石渠文庫



二頁
孤辛字
ハ人
又
云
法
々
の
後

二章九
田桑黄門新秋^{テウノクワモニ}の發明^{タツアキ}を感^{ハツメイ}ずあはれ候^{カン}

付
京カキ蔵エチの
弾ウ丸ウ

二百十
天^{テン}王^{ワウ}寺^ジ々^{カク}々^{カク}樂^{カク}の候付
鐘^{カネ}琴^ノ琴^コ琴^コハ
黄^{ワウ}鐘^{シキ}調^{チヤウ}

くまのす

二夏一
叔ホウ
兒ベニ
乃
洗
け
毛
乃
順

二百廿三
折谷家願書の後

三
五
六
の
お
い
ど
か
へ

二百廿四 法陽師と家へ道名言の候

二百廿五 多欠助白拍子れおろしといふ候

二百廿六 又漁冠者新長束家物格と仰るの候

二百廿七 六時礼儀の候付吾親房れり

二百廿八 子か親加急佛の候

二百廿九 妙観が刀れ候

二百三十 又桑の四裏うく狐れどけ候

二百廿一 園別高庵下の候付少山敷れ候

判り

二百廿二 人いふ狐れどけ候

狐 山家格物論狐黄似黄

狐

狐を人よくいはくもめ候

也説文狐妖獸也鬼所乘也

三徳其也中前大後死則首丘 玄中記千歳之狐為淫婦百歳之狐為美女右圓機詩

學活法二見へたり猶狐ノ化ル一末ノ五條内裏ニ化物アリト云ノ段ニクワニ

い 壽云本寺トハ今ノ仁和寺ヨリ北ノ方ニ野アリ本寺ノ旧跡タル故ニヤ今モ本寺野ト号ス龍安寺ヨリ嵯峨ノ行ニ龍安寺ノ火ニ西ノ方ニアル野ヲ本寺ノ馬場トイヘリ此處ノ事也季吟云

野地ニ本寺ハ仁和寺ライフベニト云 是本堂ノ前ト云心ニヤサレドモ専執ノ説モ捨カタクニヤ

オベラールサレタハ本寺野ノ邊ノ心ニ見侍ルベクコソ文

てふひつさげれどかたねさ

そふれとふせくる狐ニ

近と洗くひと門を洗く

一段之統論

經名

庭訓往来曰短慮
木練之仁云云參

二百十九

シ
テ
ウ
ノ
ク
ワ
ウ
モ
ニ
シ
テ
ウ
ノ
ク
ワ
ウ
モ
ニ
シ
テ
ウ
ノ
ク
ワ
ウ
モ
ニ

荒涼

● 一井案ニ韓退之詩ニ家
居率荒涼キョヲホム子 李子賀詩ニ

獨^{ヒトリ}出^デ月^{ツキ}荒涼^{ヒツシヤウ}涼^{シヤウ}ハ冷^{ヒヤシ}義^ギナリ俗^{ソク}過^カ
言^{ゴン}ノ義^ギニ用^{ヨウ}フ平^{ヘイ}家^ケ物^{モノ}語^{カタリ}ニ荒涼^{ヒツシヤウ}

ノモフシヤウトアリ

ハ
シ
子

孟子離婁下曰其義則
丘竊取之 朱傳曰竊

取者謙辭也句

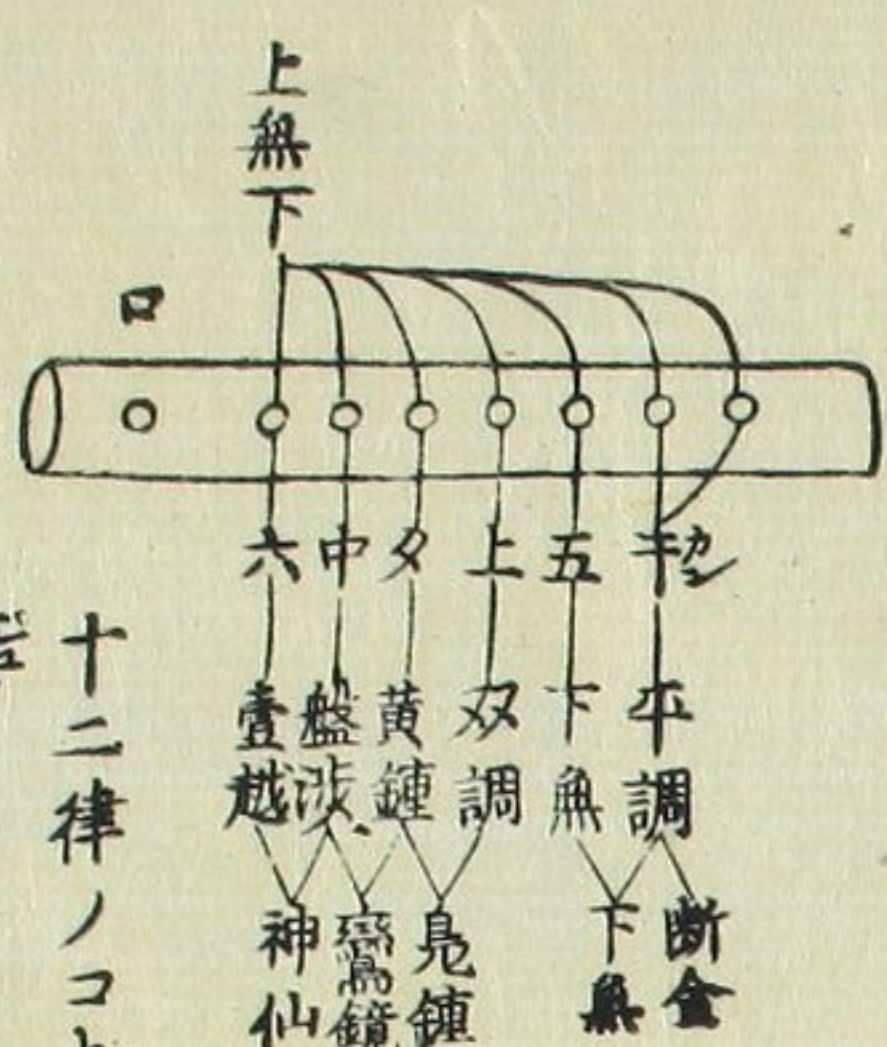
平綱

十二律之次第十一月壹
越調十二月斷金調正月

平調ヘイテウ 七月シツグ 勝絶調シヨウダツ 三月サンゲツ 下魚調ゲイモ 号ガウ

萬^{マン} 四^シ 月^{ゲツ} 又^{マタ} 調^{テウ} 五^ゴ 月^{ゲツ} 鳧^フ 鍾^{シユウ} 調^{テウ} 六^{ロク} 月^{ゲツ} 黃^{ワウ}
鍾^{シユウ} 調^{テウ} 七^{シチ} 月^{ゲツ} 鸞^{ラン} 鏡^{ケイ} 調^{テウ} 八^{ハチ} 月^{ゲツ} 盤^{ハン} 涉^{セツ} 調^{テウ} 九^ク
月^{ゲツ} 神^{シン} 仙^{セン} 調^{テウ} 十^{ジュウ} 月^{ゲツ} 上^{カミ} 無^ム 調^{テウ} 号^{ガウ} 鳳^{フウ} 音^{オン} 調^{テウ}

橫笛之圖



十二律ノコト傳ト
授ヅナクテハ難知

一、ふ先と^{ズニ}なと。そ^{ユエ}故ハ。平^{カン}此^ニ完^ニと平^ニ調^ニ。又^ゴ此^ニ
 ●是又^{ツアキ}終^ヒ秋^ナが早^{コバ}下^バ此^ナ終^ナへ^ナ。 **首出虫**
 ●二^{セツ}月^{セツ}の^ニ完^ニ。 **首出虫**
 ●三^ニ月^ニの^ニ完^ニ。 **首出虫**
 ●四^ニ月^ニの^ニ完^ニ。 **首出虫**

五二の間はなり 誠

冠老乃圖とんふく

三日月の穴 該

首書

二、月は諺

ひごにあさきれや。ちん来

く。龍リウ杖ツヱと道ミチよりりてハヤ

●
樂^{カシニ}人の名^ナあり

● 音系乃^{ヲシカク}たよとりて之を花

トヨハラ
豊原氏^{ウチ}筆^{ヒト}と吹^{フキ}家^カより地^チ下^カへ是^{コノ}後^{ノチ}脱^{ダツ}伏^{フツ}す
セニツ
先^{マテ}祖^ソへ是^{コノ}系^{ケイ}氏^シを畧^{リヤク}して是^{コノ}と合^{ガヒ}ふ

月之云。體過此。乃。

タツアキ
 秋が黄門へ来て
 ●
 是より秋が朝之
 ●
 エニリヨ
 秋が朝之
 ●
 ナニタ
 秋が朝之
 ●
 エニリヨ
 秋が朝之

●極ゴクの字

荀彧

かり
●ふふなるふふれどもよし

有玄骨

ハメ^{ハメ}荒^{クサ}原^{リガ}乃^ナ来^キた^タま^マに^ニ

横筆の如く宛を聊り

●
常子
此節の如く

●^{カニ}牛と^{イサ}とあるは完と文

一 此乃 明之 子

と。池タビツ日ツり
京カゲ茂トう。り。作

是より悪好
●
是より悪好
●
大井氏八幡のふれ井の
ある位は是も常候
下のふれ井の常候

● 楞嚴レタゴン 第四タイ

早也。第^{フエ}と吹^{フキ}かゝる^{イキ}息^{イキ}は
 調子^{テウシ}と合^{アヒ}うとけむ吹^{フク}うかき^{サカ}細^{サイ}あはれ^{アハレ}とす

うらみき。止^{カッ}まき[。]ゆ[。]物あ[。]れ[。]い[。]ふ[。]

3
 とに
 1
 は^テ偽^ニれ上
 2
 性^{セイ}骨^{コツ}然^ニく
 3
 りて
 4
 らを
 ク
 テ
 ニ
 い

● 売しゝハ上よいのなる千五上
中六の此売を指張

乃^キ用^{ヨウ}と^ニ公^{コウ}衆^{シュウ}あ^ハる^ニ一^ニ又^{マタ}衆^{シュウ}又^{マタ}公^{コウ}衆^{シュウ}一^ニ

[illegible]

とちつのも定^{サダ}む海^{うみ}の^{なみだ}に^{なみだ}あ^{なみだ}く^{なみだ}吹^ふが

タツキ
新秋流
とてける
新文

●上より不快といふと愛をわづびていふ句

何^{イッ}も^ナの^ナ穴^{アナ}も^ナう^ウ海^{カイ}よう^{ヨウ}に^ニ上^ウる^ルは^ハい^イづ^ヅれ

と吹あそび。呂律^{リョリツ}乃物よりハズレ

人の心は世の心
カクキ
ツハモ
の心は世の心
シツ
の心は世の心
ハ
の心は世の心
コトクカシカチモチ

● 個コ子シ乃ノわワやヤわワかカざる ● 樂ガク登トウのノ難ナンやヤわワくクすスとト之ノ不フとトとト思オモふフ

めし 糸 底 が け へ へ

ハミ^{フク}吹人のそごそと
なり文●は舞はよく
配^{フク}ハミとくてもるゝ調子でも
とねゆへは不快なりぞといふべし

為好乃こりり
たり白

新杖とて中なるを説

もよあそびの文 菊池

一段之統論

ト世シレシナルベシ文●奴上ノ義景茂カ返答コトノ外位アリ此等ニ

ラツクベキ事也我道ナラヌ又更ニハ少し心ノ及ハヌ事アルト見ヘタリ萬事用捨スベキ哉
ナルベシ壽●上ノ段ニハ狐ハ人ヲバカストノミ思ヒテクヒツク事ヲレラザルニ喰ツク事モアリ
ニ列ヲリテ諸人ノ心得トナシ此段ニハ龍秋ガ料簡一應尤ナレドモ又景茂ガイヒ分ハミ

大鐘個

●井案漢書二十
律歷志云五聲

之本生於黃鐘之律云又云黃
鐘黃者中之色君之服也鐘者
種也天之中數五五為聲聲上

官五聲莫大焉地之中數六六為
律律有彩色也上黃五也莫

則黃鐘為王李善注云呂氏春秋
曰黃帝命伶倫為律伶倫制十二

蕭聽鳳鳥之鳴以別十二律以此
黃鐘之官故黃鐘官律之本也李

周翰註曰六律六呂為十二黃鐘
律宮之聲也官為君故為主也句

源順

●源順カ八月十五夜ノ歌
水ノ面ニテル月ナミラカ

●今宵ノ秋ノモノカトリケリ
涅磐經師子吼品第十一

春陽之月万物生長種植根栽花
果敷榮汀洲盈滿百獸爭乳是時

指南

●案二文選卷五左本仲吳
都賦俞騎騁路指南司方

劉淵林注指南指南車也鬼谷子
曰鄭人取玉必載指南之車為其不

惑也▲袁了凡綱鑑註指南車古制
不可倣至唐憲宗時始定其制蓋車

有機四角刻木為龍又刻仙人羽衣於
其上車雖回轉手常指南軒轅用之以定四方示軍士也或曰車上用子午盤針以定四方

本へ來ルハ三十九代天智天皇五年二唐沙門智由指南車ヲ献ストナリ又指南車ノ
事ニ説アリ▲句解曰瑯琊代醉編卷三十三馬鑑曰大駕指南車起千黃帝及蚩尤

戰于涿鹿之野蚩尤作大霧皆迷四方於是乃作指南車以示四方遂擒蚩尤而即位李
豫享曰指南車舊傳周公所作越裳氏重譯來献使者迷歸路周公錫以駟車五

黃鐘個れにありたり

●漢書律歷志云五聲
中夾比調子なりま
漢書律歷志云五

首末止

●調子とも細く別べん
と下わらんこは後代
と黄鐘個の宛ゆーと

●調子とも細く別べん
と下わらんこは後代
と黄鐘個の宛ゆーと

●調子とも細く別べん
と下わらんこは後代
と黄鐘個の宛ゆーと

●調子とも細く別べん
と下わらんこは後代
と黄鐘個の宛ゆーと

●調子とも細く別べん
と下わらんこは後代
と黄鐘個の宛ゆーと

二月涅槃會より聖靈

●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日
●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日

●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日
●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日

●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日
●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日

●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日
●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日

●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日
●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日

●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日
●二月十八日ノ釈尊ノ成道ノ日

虎使解飛龍使令孫生又造宋
武平關中待之其制如鼓車設宋
人於車上舉手指南車驟回轉所
指微差句

いづれの歌とも
尚書云
八音克

諸無相奪倫野

每常此觸子
平家物語三祇園精
舎ノ鐘ノ声諸行無

常ノヒキアリ毒皆此平家物語
ヲ證文トスレトモレハカリニテハフタケ

オキフ也往生要集日諸行無常是生
滅滅生滅々已寂滅爲樂祇園寺無

常室四角有頗梨鍾々中亦說此偈參

祇園

大藏一覽第二曰經律異相云佛大檀越須達多
長者居舍衛國常施孤獨故曰給孤獨因住手
舎城護彌長者家凡男求聘因見其家諸佛說法須達
本事外道忽聞佛法生觀喜心接足
作礼而白佛言舎衛國人多信邪
弟子欲營精舎請佛住此願垂聽許

ととやうめの一たりたり

ととやうめの一たりたり

ととやうめの一たりたり

ととやうめの一たりたり

ととやうめの一たりたり

ととやうめの一たりたり

佛然受請即遣舍利弗指授規則
遍處求踏唯祇陀太子一園廣
八十頃林木鬱茂幽靜可居既得
勝地往白太子戲曰滿以金布便當相與須達喜曰此園已屬我矣太子對曰我戲語乎兩成興許時首陀天
下爲評議以太子法不應妄語價既已澤不宜中悔須達出金八十頃須達更欲滿尚缺火地祇陀即許須
達園地屬汝樹林屬我以上佛提綱定基之際舍利弗忽笑須達問其故答曰汝始於此經營而六欲夫
常殿已成汝果報也即借須達道眼見問舍利弗是六欲夫何處最樂舍利弗言第四欲夫神處最樂第
常彼說法須達言我生此出言既竟餘宮悉滅精舎告成凡千二百處自王遣使請佛安居靈宇幽第
三卷野●須達長者金ヲヒテ地ヲ買求樹ヲバ祇陀太子ノホドコレヒ故ニツブサニハ祇樹給孤獨園
ト云ナリ給孤獨トハ須達ノ德号ナリクハレクハ賢恩經ニ出タリ參

精舎

●長水楞嚴疏曰精舎者即沙門精行所舎處也釋要鈔曰精舎者非衆暴者所居故曰
精舎參●釋氏要覽曰釋迦諸曰息心所棲曰精舎藝文類聚曰非由其舎精妙良由精
練行者所居也句

無常院

●西域傳曰祇桓西
北角日光沒處爲
無常院若有病者當安其中意
爲凡人心貪著房舎衣鉢
道真生應著心無厭背故制
此堂令明石見題悟一切法無
皮常故祇桓ハスナハチ祇園

ととやうめの一たりたり

てゐ成^{ツク}りて尾^オ髪^{カミ}より

ハ三四尺ノ竹ヲナカバワリカケ
テ或袴或羽織ナドハサミテウダ
ケ持シメタルヲ當御代次第ニ過
長ニナリテハサミ竹見グルニトテ
箱ニ致セシナリカノ名ヲカリテ摔
箱トイフ也放免モコレカタクヒナル
ベハサミ竹モ傳授トイハシヤ金
●古歌ニ「クモノ井ニアレ
タル駒ハソナグトモニ

道カクル人ハタノヘニ毒

道志
●職原下檢非違使ノ下ニ
志アリ 明法道輩六位
時任衛門志即蒙使宜旨也凡
志者奉行使廳諸公事之故以
當道爲其撰此号道志也毒
●道志ハ今云フ雜也ノヲ也祭ノ子
リモノ跡ニツキテ行也説
●道志ハ足輕ノヤナル者ナリ祭
ノ日ノ下奉ハナリ 新注

とゞ志もどして物れ井
書くる水干はきて歌代
●古歌をいひて・衣服の足・袴の井とある水
干と馬れ背に付くと云・井水の
せふとくふと云ふ
●此段賀茂ノ祭ハカレヨリハ兼好が時分ニワタリモノ、カガリイロク
ノ物ヲトリツケテ過シナルヲタイフナリムニヨリナチガヒタル

道志
●職原下檢非違使ノ下ニ
志アリ 明法道輩六位
時任衛門志即蒙使宜旨也凡
志者奉行使廳諸公事之故以
當道爲其撰此号道志也毒
●道志ハ今云フ雜也ノヲ也祭ノ子
リモノ跡ニツキテ行也説
●道志ハ足輕ノヤナル者ナリ祭
ノ日ノ下奉ハナリ 新注

此段賀茂ノ祭ハカレヨリハ兼好が時分ニワタリモノ、カガリイロク
ノ物ヲトリツケテ過シナルヲタイフナリムニヨリナチガヒタル

一段之純論
●此段賀茂ノ祭ハカレヨリハ兼好が時分ニワタリモノ、カガリイロク
ノ物ヲトリツケテ過シナルヲタイフナリムニヨリナチガヒタル

禮記曲禮註呂氏曰先生者
 父兄之稱有德齒可爲父師
 者猶父兄也故亦稱先生以師爲父
 兄則字者自比於子弟故稱弟子衆
 遺教經節要曰学居師後故言弟解
 從師生故稱弟子是出家之弟
 子之義也四書圖
 解曰弟子後生之通稱爲人弟爲父
 子者是在家之弟參
 子之義也

追福
 ●佛家ニ福智ノ二門ナドイ
 ヒ又十六觀經ニ三福ナド説
 カニテ其修ハスル功能ヲカシテ福
 此二字隨願往生經等少

下出タリ參

●觀心男要集曰縱雖不順心
遂應有巨益參

絶文と云ふなり
 普訪聖教之説全無救度妙術
 カレトモ地藏經曰更爲身死之後七
 七月内修齋念佛能使亡者超昇
 又曰念佛菩薩名號一歷在二入耳
 根縱有罪業亦得消除
 遊心安樂道

難^ラ危^ニと^ニト^ニさ^ニれ^ニく^ニり^ニひ^ニる^ニ。

法經の中は亡者とならざる法則なりといふ光の
 言をうらまへてく霊魂とある法なりとい
 るやハ余が房のうらまへてくこととわらず
 歳常此法作は新經の元曉とて一なるを偽
 の経にあらずといふ自作の書也ハ光の言なり
 てハ靈魂とある法なりとあるて此文は不空
 絹索經の光の言とちあはれハ阿毘達磨
 體の上はうけてこれとちあはれ經又を引てこととあり
 さてそのとりよひたるはよく聖教乃經と見
 えて先亡人を救度する如術なりハ沙はわかれ後
 悔とてとてとてうびることとて思はるは偽も
 ととてうらまへ修め乃人なれど阿毘達磨の疏と
 も作まり今此世の唯密教の人ハ念佛をうと
 して光の言とばりてハあわづることとわらうと
 うらりてとて又ある中ハ中ハ浄土家と
 此ハあまぬハ法經乃選撰集あはれとて
 用ひてこれとて衆教房も法經乃衆教を
 此世の衆教とて思はるは信作とてとて

と覺く他日参

テ
子^レどもといふわがハヤシ

●
ゴウカクニバウ
衆^デの房^モ此
子^デども也
子^テ義前^ハ出^セ

●
タラシサ
親^ノ經^ヲうゝ念佛と係名と云ふ
ときつけてあれどもうこれ念佛
ハ極名れ義と爲候れ家より今の家

けろぞ。念^{マシ}ふ^{フツ}はもつらむ。すさ
ふ。ぬきも。うらなふ。と。つらむ。

むねづとやこれぞ我宗たるにぞいささ
 ●毛をうがひ子どもは不審ぞ一知 ●毛より紫の房に参る 談 ●念佛宗たるにぞ
 やさ海河よりつまぎとて海よりく 祢々成

ツイフク
益後ニ倣して巨益を
巨ハ大なり益ハ利益
前出
煙のどとハ接

59
 首書堂
 註
 あり 諺
 首書堂
 あふるのふのぐろくそれど
 アニキトウ
 二

ケル

● 經文ニテ其證ヲタツルトキハ念佛三
功能ノナキニアラ子ド其實ヲイハバ
念佛ト光明真言トハ其法式各別ノ手段ナルベシ其子
細ハ其法ヲ行フ密教者ニアラ子バ其ワカチハシラヌ事

也先念佛トイフハ三心具足シテ
稱名ヲ修スルヲ以テ本意トスモ三
重病「テ一人ノウヘニ耳モ目モツブレロ
モ啞ニシテ此三種ノキビレク其身ト
リニ任持シタルモノアラシハ念佛修
行モカナフニシキ事也然ルニ光明真
言ハ主密加持トテ手ニ印ヲ結ビ口
ニ明呪ヲトナベシ心ニ三昧耶ヲ觀ジ
テ滅ノ中ヘ其功能ヲ封ジコメテ其死
骸ニカケル時ハ其死カバ子光明ヲ放
テタスカル殊勝ノ徳アルヲナル故ニ
イカホドホメアケテモクルシカラヌ事
ナリ參●念佛ハ追善ノ益ニナラ
ヌニモアラズ追善ニ修セヨトアル經
文ハ此真言・陀羅尼ニ准シテハ
證文スクナレ然ドモ念佛追善ニ

とよむらひはふしをふ
ととつとくともせたり
いふとさんと思ひく
経のうあふとて
● 不空・密・索・經の
二十八灌頂を言成
純品及び大略
盧遮那陀羅尼金
剛頂咒の生言
儀軌のうび一
切のまじり密金
剛・密・利・書・經
とめて念佛ありとて後代に傳へ
るは念佛の流儀ハあつたが
一毫なりとてわりやうあるひ
はとむり見てをよとて參
けり後々後あり 首書參

此真言陀羅尼と云ふ

念佛スレバトリモノナラズ弥陀佛
ノ廻向ノ心ナレバ他ヲスフニ何カハ利益ナカラニヤ
念佛本願ハ現身ノ利益ヲ表ニ説給フ如經文又
光明真言等ハ追善バカリ巨益アリテ自身
成佛ウスキヤナレドサニハアラス諸佛ノ本願ニ
モアハズミテ念佛行者ニモアラヌモノ、惡所ニ
隨在シタルモノラスクニ給フガヲモテナリマシテ
自身成佛タガヒナシ真言念
佛表裏ノカハリノ利益同シ金

● 先のまじり密金剛・密・利・書・經
とめて念佛ありとて後代に傳へ
るは念佛の流儀ハあつたが
一毫なりとてわりやうあるひ
はとむり見てをよとて參
けり後々後あり 首書參

一段之統論

● 此段勿論光明真言宝篋印陀羅尼ノ功能ヲノベルトイヘドモ本意ハ名僧
ニアラソハヌ事ヲ指南セルト見ヘタリサテ此一章ノ大意ヲ心得タクハ沙石集ニカケルヲ見テ
シルベシ彼集云道理アレドモ證文ナキハ奏シガタシ佛法ニ偏頗アルベキ事ナケレバ自他宗

なりと云ふれける。

野
植
口
通
憲
澄
憲
聖
覺
隆
承
憲
寶
憲
基
叱
冒
道
事
元
亨
釋
書
二
十
九
二
委
乙

源氏物語

東鑑第六文治二年三月一日豫
州義安寺及母磯禪師自京來于
鎌倉四月八日二品朝并御基所詣
鶴岡召許女於田所欲令起舞曲彼
天不召人也欲見其藝舞三周辭不
得已而即白雪之袖發黃竹之歌祐
經打鼓畠山重忠為銅拍子靜先
吟出歌云 吉野山峯ノシラ雪フミ
ワケテイリニヒトノアトゾ戀ヒキ
次歌別物曲之後又吟和歌云
コヅヤシヅノラダマキクリカヘシ
ムカシヲ今ニナスヨシモカナ其壯觀
梁塵殆可動上下催興云 五月十
四日祐經親原景茂千葉常秀八
田朝重藤判官代邦通等相具下
若等向靜慈宿催宴邸曲盡妙磯
禪師又施藝同二十七日入夜靜
女大姫君仰參南御堂施藝云

白拍子根源也

源平盛衰
記十七云世

二白拍子ト云モノアリ漢家ニ唐氏揚
貴妃王昭君トドイヒハ皆白拍子リ
我朝ニハ鳥羽院御宇嶋ノ千歳若前
トテ入ノ遊女舞ハシメテリ初ハ直垂
ニ立烏帽子腰刀ヲサシテ舞ケルハ男
舞ト申ケリ後ハ事カラアラフヒトヲ
烏帽子腰刀ヲ止テ水子ニ袴ガリ著テ
フ其比京中第一白拍子アリ姉ヲハ
祇王妹ヲハ祇サト云又佛白拍子トイフ
者アリ皆清盛入道寵愛セシトイハ
コニハ磯禪師ヲ白拍子ノ根源也ト
云是兩説ニテ侍ル近年出雲巫京ニ
キタリテ僧衣ヲ著テ鉦ヲウチ佛号ヲトナヘテハシメハ念佛ヲドリトイヒニ其後男ノ裝束ニカヲ
ヨコタヘ歌舞ス俗ニカブキト名ツ又田刀舞ト申ケル似タル事元朝ニハ天魔舞ト号スルアリ今
ノカブキニヨク似テヲボユル天魔舞ノ事龍飛紀畧第一ニアリ野推ニ詳也

源光行

出羽河内守左衛門尉後鳥羽院之北面五位下義濃守光衡カ子ナリ
土岐ト号ス源氏物語河内本トイフハ此光行ノナナリ 又号淺野判官

乃後師といひける女は

あ平なまさうまねとさ

せ。烏帽子とひか入る

れ。いひける年とさ

ける。後師がひすめ志代

は。いひける白拍子

は。白拍子乃根源なり

の字とつていふ

の字とつていふ

の字とつていふ

の字とつていふ

の字とつていふ

の字とつていふ

の字とつていふ

廿七

く。七徳の歌と
分レバニジフ 白氏文集ニ新樂府ハ家細。
わりけ龜初ハ破陣樂ハ龜
といひーと後ニ七徳樂と
名付ー也文・七徳の舞と
ハハ鹿乃ハ家ハ始秦王ナ
時劉武周を破る
軍中おもはれりー破
陣樂といふ曲なりそなた
家位ハ郭公ハ乃々高
令ーまうふハ必曲と奏
一まう後貞観七
月ハ名とせしむとて七
徳舞といひりけまされ
樂府の七徳歌と云ハ白居易
易け七徳歌と号しーと
傳りー又かりけ又ハ常
舞ハ彼ハ家ハ七徳の舞
と傳ふ。まうふハあし

九郎判友

義經ハ源義朝ノルヲナルニ
源九郎ト云也又判官トイフハ檢非

違使ノ一任ニ任セラレレユナリ判

官トハ檢非違使尉事ヲ云ナリ

又・義經ハ龍子ト云九左衛門

木尉從五位下武畧長名將也

文治五年閏四月二十九日燒奥

州平泉衣河館自害歳三十一是

依提原平三景時之謠言也其

鬱憤之起在津國渡部逆權遺恨

清和天皇 人皇五 貞純親王

經基王 滿仲 賴信 賴義

義家 八幡大即殿是六前最明寺殿鶴

爲義 左衛門尉從五位下下野守實從五位

也祖父義家爲義 我朝 從四位下

義親義家男也

範賴 從五位下參河守範賴

遠州蒲生御厨出生之門

号蒲冠者賴朝弟也文治

二年於伊豆北条依會見

源二位命被誅焉

義經

學ひし事也

事文類聚三謝

安ハ洛下書生

誰ノ上手也世上ニ其名高鼻病ア

リテ音濁リタリ洛入其聲ヲ学ビ

テウタヘリト云 此生佛が流ノコ

トシ説

・此も後合さる事

・いひし事

・乃が事

・今も

・道徳式

・今も

・道徳式

・今も

・道徳式

・今も

・道徳式

・此年家を別人の姓のやうに
改めりといふ事とあるは改め
るハ改姓と用ひてゐる

・佛といひける言

・同ノ教て

・乃長入道義経は

・道徳式

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

・乃の

として竄のうゝひとするものゝうゝくひれ
 度々のうゝそこあゝとゞどそれみちて
 登とせかうふとんとんそつげゝる名をうゝ
 えん平家おとと登うてわせりの検校向
 乃おとたれど登登法師といふ事れ度々の
 事といふおとたれとて参

ノ仁心ナルベシ句●觀修寺良門十三代ノ孫兼室時長平家物語作者ノ隨一也ト公卿補任ニア
リソレハ四十八卷ノ盛衰記ナルベシ行長ガツクルハ十二卷平家ニテ生佛ニラシヘタリ又俗間ニ
平家勘丈一冊アリ六人ノ作者ヲ載タリ舛誤多クハ信用ニタラス凡此物語ニ數本ア
リテ徃徃ニ不同アリ野

六時礼懺^{ロウジライシ}と法^{ホフ}法^{フシ}上人^デの身^ミ
 書^{カキ}の名^ナなり疾^{ハヤ}・蓋^{フタ}和^ワれ六時^{ロクジ}は淨土^{ジョウド}とい礼懺^{ライサシ}して
 罪障^{ザイショウ}と清滅^{セイメツ}せし勅^{ツク}めり^{マサ}の法式^{ホフシキ}なり参^{サン}・ぶ虫^{ムシ}の
 作^{サシヤ}念^{ネン}よつてて疾^{ハヤ}わり^{ワリ} 前^{マエ}土^{ツチ}也^ヤ
 子^コ安^ア樂^{ラク}といひけり^{ケリ}淨^{ジョウ}土^{ツチ}の經^{キヤウ}文^{モン}
 信^{シン}施^シの^ノびうろあふん 前^{マエ}書^{ショ}也^ヤ

六時禮讓唐善導和尚

集記セフレタルハニア一巻アリ題号
ニ往生禮讃トアリ書中ニイタリ
ニハ六時礼讃トツキタル文字モ見ヘ
タリ懺文ニ中ニアコトニスクレタル本ナ
レハ大藏經ニモラサメ入ラレタリ善導
五部九巻ト云ルチノ隨ニナリコニ
安樂カ作ナリトイヘルハ不審ナル事
也カノ礼讃ノ文段事ノ外ナカキユヘニ
モレ其中ヨリ略式ノ勤行ヲハジメテ
作り出セル事モアリケルカ今ノ淨
土宗ノ世俗ニ發願經トテヨムモ此礼
讃ノタチヨリ發願ノ文ヲヌキイタレテ
用ユル事ナリ

テ源空ヲ讃州ニナギ安樂住連ヲ斬給ヒシナリクハシクハ黒谷上人傳ニセタリ 参

聲的

一念の多義

法然ノ末弟ニモテ
念義多念義一テ

種々ノ派流アリ一念義トハ念彌陀
佛ヲ頼ミテカケテヨリノチフタビ
念ゼ子トモ往生決定ト思定ムルト
ナリ又多念義トハ一生ノチ名号
ノ数功ヲホクツモラ子ハ往生シカ
タレトタツルト也百万遍流義ノ多
クノコト其一念義多念義ノ由緒ハ
東大寺ノ凝然ノ淨七源流章ニクハ
シク見ヘタリシカラバコノ一念ハ一
義ノ念佛ノ事カ猶可考参

後醍醐院

山井案人王八十七
代後醍醐院諱邦仁

土御門院 八十三代 第二子母贈皇后
宮通子贈左大臣通宗公女也承久二
年二月廿六日降誕仁治三年正月九
日踐祚 年時二 同日元服三月十八日
位同十一月十二日大嘗會寛元四年五月
廿九日讓位 年七 二 五日尊号治四年文

一段之統論

五年十一月五日於龜山仙洞御出家
上ノ段ニ慈覺大師ノ御遺教ニ
此段ニモ同ノ秋門ノ法然安樂普觀ナドノ名ヲ取出シ六時禮讃ハ事蹟ノ始ヲ
ルテヒロク諸人ニシラシム兼好ノ例ノ仁心ニシテ此段ハ本時禮讃法事蹟等ヲ聲明トスル事ヲコリ
ヲ書シ 禮讃ノ偈ハ唐ノ善導ノ作ナルニ要樂トイハルハ是兼好ノ覺チカニナルベシツクノ思フニ
其比安樂ノ此偈ヲ不斷トナヘシ故ニ世ニカイフヲソノマニルサレタルニヤ 新注 六時礼讃ハ善導ノ
御作勿論ナリシカレドモ善導ノ作ノマニテハ往生ノ行業ヲ心得ニハヨシ勉ニナリカタニシカルヲ
樂房善導ノ五部九卷ノ往生礼讃ヲ六時ニ分テツトメニナリヨキヤヲニ致セシナリコレ六時礼讃ト
名付ナリ兼好アヤマリニアラス往生礼讃ト六時礼讃トハハルカニチガヒタルナリミルベシ金 九淨土
ノ經ノ文ニ節ハカセツケテ聲明ニナセル事本朝ニテハ慈覺大師ヲ元祖トス此大師入唐シテ法
道和尚ニアヒテ引聲ノ阿彌陀經念佛三昧ヲ相傳シテ歸朝シ至ヘリキ是極樂淨土ノ法音ヲツツ
ヘルナリ坂本赤山明神ハスナハチ慈覺大師ニモロコヨリ隨逐シ至ヘル念佛守護ノ明神ナリトカ
ヤ此事台家ノ津金名目ノ中ニモ見ヘタリ今ニイタルモロコシ魚山ノコエヲスグサマニツタヘタル
明ノ家ハ層山ノ別所大原ニカギルナリクハシクハ元亨釋書ニセタルカコトシ今ニイタリテモ淨
土宗ノ法事ニ奉請四方如來入道場散花樂ナドヨミアゲテ阿彌陀經ヲヨムハ皆覺大師ヨリ
引聲ノ念佛也法然上人天台宗ノ僧ニテアリシユナリシカラバタトヒ善觀房トイフ者アリテ聲
明ヲハシメタリトモ皆慈覺大師ノ引聲ノヒキヲウツシタル事ナルベシ参

子イ

釈迦堂綱木
報恩寺用明
二
百
八

大皇御自創 云 今 本堂庶原

子イ

釈迦堂綱木
報恩寺用明
二
百
八

大皇御自創 云 今 本堂庶原

子イ

釈迦堂綱木
報恩寺用明
二
百
八

子イ

釈迦堂綱木
報恩寺用明
二
百
八

子イ

釈迦堂綱木
報恩寺用明
二
百
八

秀衡建而如珠上人云云

十本廿テコヲ十本ト云事

岩屋ノ日ハ上人冥途ニ趣キテ延喜

帝ニ逢タテツリニ帝勅定アリ

吾無實譚言ヲ信ジテ無罪管

相ヲ左遷シケルニヨツテ今地獄ニ落

苦患ヲ受ル也汝婆娑ニカヘリ

孟子ニコノヲモムキヲ告テ吾タニ

本ノ卒都婆ヲタテ、吊フヘシ然ラ

ハ苦ヲ離ルヘシト宜ヒニヨツテ上

獲生シタテヒテ右ノ勅定ヲ奏聞

モヒテ船岡山ニ十本ノ卒都婆ヲ立

ラレシナリ其辺ナルニヨツテ十本

云ナリ一説ニコニ釋迦念佛トイハル

リ十本ニ光明山引接寺トテ閻魔堂

ヲ説モアリ但シ大全日此奥ノ自

事ナリ閻魔堂ナド、ヲモヘルハ

梨窓三筆ニ惠空和尚曰十本ノ

安ズルニ法興ノ孫弟子ナリ

号實明又事西空練浄土教長

如輪、研天合説、流義兼隨長西

迦念佛、峨峨清涼寺土生寺并

一云八田寛ノ事欽山案

一段之統論

此段ハ上ノ段ノ餘意ナリ故ニ同段ニ書タル本モ有書抄及ヒ貞徳ナド

ハ別段ニシタカヘノ文

古文眞寶後集

賈誼亦屈原賦

日莫耶鳥鈿分鈿刀爲銘

子日莫耶斷割砥礪之カ壽

教指歸日鈿刀切骨必由砥助

觀音像寶龜十一年七月

十八日比丘妙觀刻之千臂千目

嚴端嚴又加四天主像凡五尊三

日而成八月十八日妙觀合堂而化

在音之靈應也

仲芳撰州勝尾

寺靈縁如ニモ妙觀像ノ事

書リ野

二月り十八日七涅槃佛の像

とけて涅槃の式今あるま

で毎ありあけ代り十八

日ハ八幡とて

山姥尾山律院今ハ今ハ通

ありて法を授け

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

とけり

院の年号

山案ノ文永

年ノ秋加ハ

佛ノ事

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

一段之総論

此段ニ義理アリトテ種々ニ注ヲツクル人ヲホレレカルベカラス。此カニタルガ
 不及ノアキ心ナリアリニキレズバ小カノワサニテ作者ノ心ノミナラスニテ其カタチニ
 ナドヨカラストゾ火ニフキトイフ此火ノ字眼ナリ又妙觀ノ事ハ權化ニテ凡ノ業ニ類セ
 三柱ニ出サレタリイタタススト云所ヲヨク見ルベシ人ノワサニアラス。金・上ノ段ニ如輪ノ
 名出タルニウケテ又此段ニモ佛工妙觀ガ事ヲ書ルテ已カ志ヲ人タリツラ。此段ノ意ヲ
 按ズルニタトヒ妙エナリトモ利刀ニテハモレ切過ニアラシ鈍カニテ幾度モキリコト見ニハヤチナカ
 ルベシサレバヨキ細エハスコレニフキカヲツカフトイフ細エノミニアラス此理諸事ニワタルベシ孔門三千
 ノ弟子ニアキニハアラス却而魯鈍ノ曾子一貫ヲ傳授シテ其血脉ヲツケリ殊ニ兼好ハ莊老ヲ好テ
 スム事ヲ恐レ退クヲ以テ道トストキハ誠ニマフニチカクニキハ終ヲタモツトハリ顯然タリ

うーのそと
 抱北子
 内篇ニ
 二十

モ基ヲツツ時鬼魅キタリテ見
 タルヲアヘミテヤカニ見レハ
 ノバケタルニテアリシ事ヲノセタ
 リヨ「ヨク似タリ」

●本草綱目
 李時珍曰

仙手百歲禮北十癩化爲男女淫
 婦以入又能擊尾出火事類
 集二十七曰野狐一名紫夜
 尾出火爲怪必戴觸體拜北手
 觸體八則化爲人矣 西陽 參
 ●山井案三五雜組卷九曰狐千歲始
 與天通不爲魅矣其魅人者多取
 人精氣以成肉丹然則其不魅婦
 人何也曰狐陰類也得陽乃成故雖
 狂狷必托之女以惑男子也然不爲
 大言故北方之人習之南人狐多爲
 魅如金華家南畜三季以上輒能述
 入不獨狐也

●響の字にあらう

そへーけのよー

●有女

狐のよめ

これぬあふたれはもい

みまの肉裏の妖物あり

醍醐院の時皇居ありと
 法位ありとては白河院の時

うりの藤太の御言ありと

●白解の白大納言爲世卿
 ●まゝあり

ゆーのあと人にとどまらぬ

て基とらけりよ。御座

とけりよ。相あり。ぬ

うと見ひさし。狐人の

やうは流れて。さーぬ

きーらとあれさういふ

●あつるぬすあり

あつるぬすあり

●熊練せぬと未練といふ

て一切のうゑぬ

二見へタリ 山井案

古今事考

もろく、
よする

きりゆくと。今日 晴とゆふ

とふわくはげしく、徳んとてきくはる。

●
義の字やめしる

●餘ヨもきりあへさ人あふれど我ヒ是ヒ氷ヒ中ヒ惜ヒきん
なり又●まげてハ理リと氷ヒもまげてハ有ヒ尾ヒのヒ然ヒやみ

あまのり

ちくしていさくく
 盤
 つこのまてうんと
 奥のうとく
 古前よあ

とどろくつぐく奥わりて人をも

海にけりとおる人
キタヤ、ダイ、ジウ、ニ、シ、ト、シ、ト、ノ
心も改入道
オ、ウ、ン、ジ、キ、ニ、ツ、キ

是より心腹の親也

花園寺公序

わたりとくし
わたりとくし

ふうろく 是ゆふから。きりぬいともかく

[illegible]

人といひてんハおとよりん

少くも諺
 何一は百力の輕^{コイ}なるべきわゝるは虚言^{キコソ}なりさうさうの義^{タテマ}と又

何^{ナニ}東^{テウ}百^{ヒャク}乃^ノ鯉^{コイ}と^トき^キん^ンぞ^ゾとの^ノ終^{シュウ}ひ^ヒに^ニ

面白くおぼえしとて文・あゝるを句

●是迄少入乃夜の得る句

かきくけこ

わの
●
■
よろこびなり

● 愚好は人より多くて 諺 ● けあひといふ言ひ
あひなれば 然り人も多き 貴れ人如く 参

第一節

●國別當入道ト云ヨリイトヲカシメテナリ此段二節ヨ分
ツ文段是同ジ●山藥比節ハ園穀ノ興^コヲキ^レル^レ埃^{アイ}ノ^{サツ}埃^{サツ}

ノイトウルサキ事ヲ云テ次ノ節ニテ細ニウルサキコ、ロヲ述タリ良ニ北山殿ノ詞

大いなるゆゑに
あはれ

● 是より勲好世のふ
のむかひなり諺

うめくハミハミと無言

ふりも。無^ムな^ナくて。必^{カナラ}しく。う^ウな^ナる^ルが。ま^マさ^サら^ラに。
ふ^フり^リあ^アり。ま^マれ^レ人^{ヒト}の。響^{キウ}意^イが。ど^ドも。つ^ツいで。お^オり。

ち商尾とほろひく面白やうなとまに
 事ナリ又●金銀あぐりて求む
 び看ひ萬子ハ時節をまゐりゆへ
 なり幸あるゆなむいひくとりわく
 うまふハ一兵あるゆなむいひくとりわく
 ありしもふげしむとまに
 諸●實客よわぐもふげし
 ありきなり又

一、つゝ、ふと、たゞ、さう、いふ、は、な、い、だ。

そしうれあてとりおしういとうへ

● 何の法やもろく振舞と心とと諺
● 世話とつともなりやど云々

よわちせいのつでかくてもう紙

いふとひるふし
志ありおもしろく

ふんとおれい。勝負のまけろにこと

流るゝと云ふに。コトギトウ

[illegible]

第二節

ナルカマサル事ヲ云ナリ 山案

一段之統論

ガヨキナリサリナガラ貴人ノ座敷ニ出テハ時ニヨリテ悪事シモ吉事ニトリナレヨカラヌ

加脚指茶ノ湯道具ナドヲモスコレホムルハ礼ナルベシコレハタゞヨノツ子ノ事ノウヘニテ正直ナラヌ
 人ノ世ノ人ニヨキヤウニ思ハレントタクミテナスワガハ皆惡シト落著^{テツヂヤク}セタル段ナリ貞・山井日成

説ニ此段ニ人ニ物ヲトラセタルモツイデナクテ是ヲ奉^{モツ}ラントイヒタルマコトク志^{コボシ}ナリトイヘリコト

公ノ勤^{ナリ}仕^セノ品^{モノ}或ハ戰^ハ場^バノ武^ブ功^{コウ}ニヨツテ感^{カン}狀^{ジョウ}ニソヘテ金^{キン}銀^{ギン}封^フ祿^{ロク}ヲアタフルナリコレ其臣下ノ勞^{ロウ}ハ

廢義スルナリ是等ハカコツケテヤル義ニ似タレドモ如此ナサ子ハ臣下己ガ役義ニ勇メヌ者ノ上

ナルハアレキトナリ今案スルニ此説一理アレトモ鑒ナリ君臣ノ交ハ義ヲ以テスルナバトラスベキコトニトラス

ルハコカソツケトイフモノニテハナク則コレ義ナリシカレドモ君臣ノ中ニモトラスベキホドノ忠勤ナクトモ時ト

卷之八

卷二

おとまりなり。

●ス、テト云ヨリモノナリ、テナリ此段護ニ三節ニ分ツ也、文段ノ
分ナリ●山案此節ハ一段ノ大意ヲアゲタリ▲増鉄日グテニ前段ノ

井ノ子なり古

人のきんぎょどろり

いねが受ふ花をてふとおひ

は書の文をひらいて

いさゝかきこえ

か
ど
も
号
ふ
れ
あ
う
く
を

うさぎもとちやうど

才智あつた夫をいふ。めづるなり文

●アル人ノ子ト云ヨリヲボエシマデナリ文段ニハコレマデナリ
書クベケテ一段トナシテ次ノ節ヨリヲ別段トナセリ

諸^{モロ}拔^{ハキ}トモニ次^{ツギ}ヲ別^{ワケ}段^{ダン}トセリ但^レ書^{カキ}拔^{ハキ}ニハ同^{ドウ}段^{ダン}ニ書^{カキ}タリ今^{イマ}書^{カキ}拔^{ハキ}ニシタガヘリ●山^{ヤマ}案^{アン}ニ此^{コノ}書^{カキ}
 ハ上^{ウヘ}ヲウケテ人^{ヒト}ハ無^ム智^チ無^ム能^{ノウ}ニナルガヨキコトライハンタメニ或^{ナニ}人^{ヒト}ノ子^コノ少^シレノ学^{ガク}智^チニ自^ジ慢^{マン}
 テ父^フ兄^{ケイ}ノ前^{マヘ}ヲモ不^フ憚^{レン}古^コ語^ゴヲ引^{ヒキ}テ云^{イハ}ヒチラス心^{ココロ}ガマノヨカラヌコトヲ證^シ據^コニ書^{カキ}タハナリ

和夕^{ワタ}曰^{イハレ}拔^{ヒキ} 音^{オン}酢^サ 名^ナ
斟^{シム}水^{ミヅ}器^キ也^{ナリ} 俗^{ソコ}二^ニ柄^ヘ拔^{ヒキ}

鷺鷥 おとひくゝしそ

カルベシ筭ノ尻ハ  スコレタハ
タシキリヤウナリ句

何れいふと云ふ様ど。流るる
 龍乃様よけつんとれ
 最好の月くあえ
 うへあふし又
 かきり又

圖
あ
り
又
荷書

[illegible]

ひさくは福をひきよめと云ひてよめ

上と下の人
上と下の人

ような物なとぞハようね物なりとぞくは男れ
 ありとひさくれ梅わりやといふまはうき物の本
 と判じさめひさくハいづもまねなればめし
 あり白・淺草の指うみ野——とましりもぬく
 ありれさうがふれなりと今れ比世法師あそ
 りとかりあつれさ梅ハうけまども梅お師の
 ありあつれてあそひさくれ梅あどもぬつ
 かりものなれもようねりのかりといふま

ありとあそひさくれ梅あどもぬつ
 かりものなれもようねりのかりといふま

一、此をよみて、
其の如く之を
たす。

第三節

第三節

●又
ル入ト云ヨリ終リマデ也●此段ハ前段ニ智ノ失
イヘリケレバコニテ又能ノ失ヲイヒノ彼發端
スベテ人ハ無智無能ナルベキモノナリトイヒシ詞ヲコトハルナリ文

一段之統論

一段之統論
 上段ニ園別當入具 庖丁ノ能ニホコラレシ事ヲイヒタルニウケテ又此段
 モ私智解能ノイニメリ句●此段人ノモトヨリ智モナク能モナキ
 ガヨシトイフニハアラズ少智少能ヲハニテテソレヲサレハサム故ニサヤウニアラヨリハ無智
 無能ナルガマシニテアルトナリ又説ニハ無智無能ナルモノヤソニアルベトナリ 盤●人ハ智能
 ヲ以テソ貴トハスレ無智無能ニテヨカルベシヤ答テ曰不_{テコトヲダカニサテ}以辞害志ト孟子ノイヘルコレナリ無
 無能ガヨシトイフニハアラズ人智能アルハイツレカ是ニマサル事侍ラシサレドソレニ自慢_{ジマン}ノ心アル
 物_{モノ}レリガホニテスバロニイヒチラシテヨカラストゾコトニ尊者_{ソウシヤ}ノ前ニテハラソレザルベケレヤ
 世_セノ若_{ニカ}キ人達_{タチ}ノ得_エタリカレコキフイマシメテカケルナルベシ兼好ノミニアラス若_{ニカ}愚_グト老子
 ハノタマヒ又聖人ハ盛德_{セイタク}ナレドモ容貌_{ヨウバウ}愚ナルガコトト史記ニモ侍ルトナン新注●日本ニハ_{ハナ}老_{ラウ}
 老_{ラウ}ノ道ヲシラガル故利根_{リコン}ヲ表_ハアラハスヲ智慧_{チエ}アルモノト大名高家モカツマへ給フ故ニオサア
 ヒ時ヨリ我人ニスグレムトノミ見ユルヤウニ心ヲモツナリ兼好ハ是ヲニクミテコニレルサルト_ト一
 タリ儒者_{ニキ}モ佛者_{ブツ}モ石中ノ玉ノヒカリヲツムゴトキ道徳_{ダウトク}ノフツラシラズハ必アヤマチモイデク
 ベキ義ナリ若_{ニカ}キ人ナドニ此段ヲヨグシラセタキ儀_ギナリ貞

